

引揚げ時に発行された書類や、引揚げ船の模型、子どもたちの様子を撮影した写真などを展示しています。



海外に渡った日本人

昭和4(1929)年の世界恐慌以降、日本は長い不況から抜け出せず、また、人口増大も問題化していきました。昭和6年の満州事変以降、農村の余剰人口の移住先として満州が注目を浴び、昭和11年以降、村落を分割した開拓団や、青少年を集めた満蒙開拓青少年義勇軍などが満州に入植しました。昭和20年当時、開拓団を含め、約155万人の日本人が満州に居住していました。

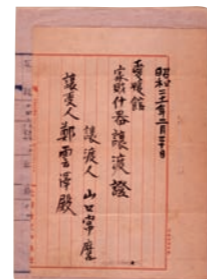
ソ連参戦による悲劇

昭和20(1945)年8月9日、突然のソ連軍の満州侵攻で、国境付近の開拓団は大混乱に陥りました。直ちに避難を開始しましたが、青壮年男子のほとんどが関東軍に召集されていたため、女性、老人、子どもだけの避難行は悲惨を極めました。避難先の都市部では、ソ連兵による暴行、略奪が日常化し、日本人は飢えと恐怖、不安の日々を送りました。ソ連軍の急進撃により逃げ場を失ったうえに、反日感情による現地農民の襲撃もあり、避難民は道路や集落を避けて原野をさまようことになりました。



収容日誌

引揚げの途中で滞在したカトリック教会の収容所で書いた、昭和21年2月1日から11月30日までの日誌です。



愛媛館家財什器譲渡証

愛媛館は朝鮮の元山にあった旅館です。敗戦後、愛媛館がソ連軍の宿舎となり、日本人の経営者が、このままでは帰国できないと考えたため、旅館に長年尽くしてくれた朝鮮人の部下に対し、建物や家財道具など、旅館の全てを無償で譲渡した時の書類です。

日本への引揚げ

旧満州からの引揚げは昭和21(1946)年4月に開始されました。引揚げ業務は23年8月に終了しましたが、生きるために残留した女性や中国人に引き取られた孤児などが、現地に残されました。旧満州を始めとする海外からの引揚げ者は約320万人に及びます。



「引揚げ船の船底で」

体験者の証言と写真を参考に、昭和21年7月、旧満州の葫蘆島を出港して福岡県の博多に向かう白竜丸の船底を再現したものです。引揚げ者の多くは、終戦の混乱の中、生活のすべてを失い、避難所や収容所でのつらい生活を経て、やっとの思いで日本に帰りました。



おむつで作った子ども用ワンピース

日本に引き揚げる際に、4歳の娘に着せようと、母親が亡くなった赤ん坊の布おむつで作ったワンピースです。



引揚げ時の胸章

引き揚げる時、少年が胸に付けていた名札です。氏名や行き先などが書かれています。



手製のリュックサック

昭和21年7月、引揚げを待つ間に、ぼろ布を集めて作ったリュックサックです。



船内食器

昭和21年3月に、台湾の高雄港で、引揚げ船に乗り込む時に支給されたアルミ製の食器です。



引揚げ証明書

海外から引き揚げたことを証明する書類です。各地の引揚げ港に置かれた地方引揚げ援護局で発行されました。引揚げ者はこの証明書により、郷里までの鉄道の無料乗車券や、生活に必要な物資の配給を受けることができました。



帰還者必携

文部省が発行した小冊子です。「新しい出発へ」という副題で、海外からの引揚げ者や復員した兵士のために、戦後新たに成立した法律や制度を解説しています。